

言心先生の中国便り

誘拐事件の深層

中国広東省東莞市の金洋市場に、李少方という肉屋さんがいる。最近、彼の商売は非常に苦しくなって、なかなか利益が出てこない。彼が商売を続けるのは、金銭的な利益以外に別の理由がある。13年前、彼の当時6歳の息子と親戚の同年代の二人の児童が突然この市場で誘拐された。彼がこの市場で商売を続ける一つの大きな理由は、誘拐された息子の回帰である。彼の夢は、ある日自分の最愛の息子が目の前に現れることである。

彼は昨日起こった事のように、鮮明に13年前のあの日の事を覚えている。朝、息子が知らない人と飛行機を見に行くと言ったが、当時忙しかったため、彼はそれに対して何も言わなかった。こ

の13年間、李さんはほぼ毎日、何故あの時息子を止めなかったのかと自責している。

中国では二年間に約二十万の未成年の児童が誘拐され売買されている。普通の人はピンと来ないかも知れないが、日本では戦後の七十年間に似たような事件は約百件前後ある。中国の児童誘拐売買事件はあまりにも多いと言わざるを得ない。

当然、児童を誘拐して売却するのは憎い犯罪者である。しかし一方で、もし児童を買う人がいなければ誘拐事件も存在しないはずである。

ある記者は誘拐された児童を買う人々を調べた。大部分の買い手は貧困な農村地方の子供がいないう中高年である。彼らが誘拐された児童を買う目的は、自分の老後の生活の為である。

前世紀七十年代以後、中国は一人っ子政策を実施している。今、病氣と事故で一人っ子をなくした家庭が、数百

万世代ある。中国語でそういう家庭は、「失独家庭」と言われている。「失独家庭」も誘拐された児童の買い手となる。

中国に存在している悪質な犯罪事件の一つ、児童の誘拐事件の深層になる原因は、政府の無責任な福祉政策にある。政府の予算は軍事、あ

るいは他の国の援助のばらまきに使われているが、肝心の国民の福祉にお金は投入されてない。

もし、農村地方の貧困な子供を持たない中高年と、「失独家庭」に対して政策を調整しなければ、中国の児童誘拐事件はもっと酷くなる一方であると思う。

